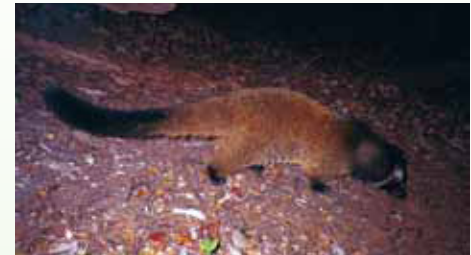




ハクビシン



ハクビシンの顔



袋井市小笠山で撮影されたハクビシン



ハクビシン親子

ハクビシンは、食肉目ジャコウネコ科に属する動物で、漢字で書くと白鼻芯。その字の通り、額から鼻にかけて白い線があることが特徴である。世界的には東南アジアから中国大陸南部に広く分布する。

ハクビシンは、飼い猫ほどの大きさで、オスのほうがメスよりひと回り大きく、尾が長く、毛色は暗い灰褐色で頭、手足、尾が黒い。夜行性で、樹洞や岩穴などを巣穴とし、人家の屋根裏なども利用する。他の日本産動物と異なり、春の繁殖以外に、秋に繁殖することも多く、1産1～3子である。冬期は、活動が鈍くなり、岩穴などに集団でいることもある。雑食性で、果物、小動物、昆虫、沢蟹などなんでもよく食べる。木登りも得意で、細い枝先の果実なども被害にあう。県内では、当初ミカンの害獣としてクローズアップされたが、今では、モモ、ビワ、カキ、トウモロコシなど被害を受ける農作物は多岐にわたっている。

国内に生息しているという最初の確実な報告は昭和18年、静岡県の浜名郡知波田村（現湖西市）で捕獲された1頭であるという。明治時代に毛皮用として台湾や中国などから持ち込まれた一部が、遺棄されたり逃げ出したりして野生化したとの説もある。日本で発見された当初は、珍獣として、山梨県や長野県では県指定の天然記念物になったり、静岡県では保護動物になったりしていたが、現在では有害動物として狩猟鳥獣に指定されている。

環境省は、外来生物法の策定に当たり「移入時期がはっきりとしない」として、明治以降に移入した動植物を対象とする外来生物法に基づく特定外来生物に指定していない。いったい、日本のハクビシンはどこから持ち込まれたのだろうか？平成22年9月に岐阜大学での日本哺乳類学会で、北海道大学の増田隆一氏の発表によると、国内各地から採集されたハクビシンのDNA遺伝子解析と、台湾のハクビシンの遺伝子解析から、国内の東日本の集団（静岡県を含む）は、台湾西部の集団に由来し、西日本の集団は、台湾東部の集団に由来するという報告があった。つまり、日本のハクビシンは、台湾の別なところから、別々に渡来したということである。今後は、いつ渡来したのが、また台湾以外から移入があったのかなどについて、検討が必要だとのことであった。

平成21年度に実施した「静岡市アライグマ生息実態調査」において、静岡市内80ヶ所に自動撮影装置のカメラを設置して、そこに生息する動物を調べたが、仕掛けたカメラの内、なんと47ヶ所でハクビシンが写っており、中型の哺乳類では断トツの1位であった。それだけ、今では県内中に分布をひろげ、中型哺乳類の中では最優占種ともいえる存在になっている。

うまく日本の野生動物の空いている生息空間に入り込んで、増えてきた動物であるが、農作物や人家への侵入被害及び日本産動物との競合を防ぐために、今後とも防除対策が望まれている。